

博士学位論文題目：

社会的カテゴリーに基づくステレオタイプの認知機構の解明
—情報処理特性論から社会的動機論への展開—

著者名：

潮村公弘

博士学位論文「要約」

本論文は、第一部、第二部、第三部、終章部の四部構成からなる。

第一部において、社会的ステレオタイプについての概説を行った。第二部においては、「情報処理特性論からのステレオタイプの認知研究」について取り組み、入力情報の質にかかわる要因の影響について検討を行った。第三部では、「社会的動機論に依拠したステレオタイプの認知研究」について取り組み、状況要因の影響についての検討を行った。最後に終章部において、研究全体のまとめと展望について論じた。

第一部では、社会的ステレオタイプ研究の分析視角として、「社会的ステレオタイプとは」、「伝統的な研究枠組みによるステレオタイプ研究」、「社会的認知研究の枠組みによるステレオタイプ研究」について論じた。また、社会的ステレオタイプの特性と機能として、「ステレオタイプの形成原理」、「ステレオタイプにおける文脈要因の機能」、「ステレオタイプ研究におけるカテゴリー化処理」などについて論じた。

第二部と第三部あわせて 7 つの実証研究を通じて、入力情報の質にかかわる要因の影響の検討と、自身がおかれた社会的な状況要因の影響の検討という 2 つの枠組みを通して、カテゴリー化処理について検討した。そのさい、対人記憶過程と印象評定過程におけるステレオタイプの認知の関係性について検討を行った。また、印象評定過程については背反する 3 つの対立仮説（対立理論）が並存している点に着目し、これらの 3 つの仮説が、状況要因に依存して支持される仮説（理論）が異なることを明らかにし、3 つの仮説（理論）が並立しうることを実証した。さらに、対人記憶過程での強調化効果（accentuation effect）を減じうることを実証するとともに、対人記憶過程での効果と印象評定過程での効果が、公的表明性の高い状況下においては、特定のステレオタイプ次元（具体的には女性性ポジティブ次元）では、カテゴリー化に基づく強調化効果が強いほど反ステレオタイプの評定がなされており、「創られた性ステレオタイプ」的な評定が認められた。

第二部と第三部を構成する 7 つの実証研究（実証研究Ⅰ～実証研究Ⅶ）は以下の通りである。

第二部：情報処理特性論からのステレオタイプの認知研究

「1 ステレオタイプの基礎としてのカテゴリー化効果の追証的研究（実証研究Ⅰ）」

「2 ターゲットの属性と発言内容の競合(話し手の性別と発言内容の性度の競合)」(実証研究Ⅱ)

「3 性別に関する情報制限下でのターゲットの属性と発言内容の競合(話し手の性別と発言内容の性度の競合)」(実証研究Ⅲ)

「4 非社会的なカテゴリー化処理生起の有無についての検証」(実証研究Ⅳ)

第三部：社会的動機論に依拠したステレオタイプの認知研究

「5 ディスカッション視聴型課題における印象評定判断」(実証研究Ⅴ)

「6 ディスカッション参加型課題における印象評定判断」(実証研究Ⅵ)

「7 交差カテゴリー化状況下での対人記憶過程と印象評定判断」(実証研究Ⅶ)

次に、各実証研究の目的と知見についてまとめる。

〔1：ステレオタイプの基礎としてのカテゴリー化効果の追証的研究〕（実証研究Ⅰ）

実証研究Ⅰでは、対人記憶課題を対象として、カテゴリー化処理に関して強調化効果が生起しているかどうかという点から確認をするための追証的研究（この点についての研究報告は本邦では見当たらなかった）が実施された。なお、そのさい先行研究に比して、発言内容の性度を事前に測定して統制をすることにより、より厳密な実験研究を遂行した。

その結果、性別カテゴリーに基づく強調化効果が確認され、性別に基づくカテゴリー化が生じていることが追証された。なお「熟知性(familiarity：対象を熟知していること)」に関する応用的な仮説は支持されず、事物知覚のさいの原理が単純には応用できないこともあわせて示された。

〔2：ターゲットの属性と発言内容の競合(話し手の性別と発言内容の性度の競合)〕（実証研究Ⅱ）

対象人物に関するカテゴリー属性と個別情報が競合する実験状況を設定し、カテゴリー属性が対人記憶と印象評定において、支配的な影響を有しているのかどうかについて検討した。具体的には、ディスカッション場面に登場する話し手に関して、「話し手の性別」と「発言内容の性度(男性的発言／女性的発言)」とを競合させた。

結果は、対人記憶課題においては、話し手の性別によるカテゴリー化が引き起こされていた一方で、発言内容の性度に基づくカテゴリー化は引き起こされていなかった。印象評定課題においては、話し手の性別と発言内容の性度とが交互作用効果的に機能していた。

ただしその交互作用効果の形態は、複雑でシンプルな説明が困難なものであった。

この印象評定課題の結果より、事物の知覚原理の応用では、通常の社会的相互作用場面（実証研究Ⅱの実験状況はそれを模したものであった）でのカテゴリー化に基づくステレオタイプの評定の説明が困難であろうことが示唆され、第二部の社会的動機論に依拠したステレオタイプ化研究の必要性（社会的動機論的視点を導入する必要性）が喚起された。

〔3：性別に関する情報制限下でのターゲットの属性と発言内容の競合（話し手の性別と発言内容の性度の競合）〕（実証研究Ⅲ）

第二部では、入力情報の質にかかわる要因の影響を検討することが目的であることから、実証研究Ⅲでは、実証研究Ⅱにおいては音声刺激と顔写真刺激を用いて刺激呈示をしていた設定を、OHPを用いた文字情報のみによる呈示とした。この操作は、話し手の声の質や抑揚などのパラ言語的特質ならびに顔写真による視覚的情報が失われることにより、話し手の性別に関する情報を最大限に低減させた状況を構成し、話し手の性別に関する情報として「男性」「女性」という文字による属性情報のみを呈示した。認知科学的な用語で表現すれば、性別に関するアクセシビリティを低減させた状況を設定したと言える。

結果は、対人記憶課題においては、実証研究Ⅱと同じく、話し手の性別によるカテゴリー化が引き起こされていた一方で、発言内容の性度に基づくカテゴリー化は引き起こされていなかった。このことから、性別に関する知覚的特徴に基づいてではなく、男性・女性という社会的属性要素によってカテゴリー化が生じていることが示された。

印象評定課題においては、実証研究Ⅱで示されていた、話し手の性別と発言内容の性度との複雑な交互作用効果形態ではなく、男性・女性というカテゴリー属性要素に基づく印象評定は消失し、発言内容の性度によって話し手の印象評定が規定されていた。すなわち、個別情報に基づく印象評定が示されていることになる。

〔4：非社会的なカテゴリー化処理生起の有無についての検証〕（実証研究Ⅳ）

入力情報の質にかかわる要因の影響について検討していく中で、残された課題として次の論点を指摘できる。実証研究Ⅲで、性別に関する知覚的特徴に基づいてではなく、男性・女性という属性要素によってカテゴリー化が引き起こされていることが示されたものの、この時、男性・女性という社会的に意味のある属性要素であるからこそカテゴリー化処理が引き起こされているのか、あるいは社会的には意味を有していない、単なる弁別のための属性要素によってもカテゴリー化が生じるのかどうかを確認しておくことが必要である。

そのため実証研究Ⅳでは、対人記憶課題のみを検討対象として、男性・女性という性別に関する属性要素と、記号情報（単なる記号としての情報）にすぎないA、Bという識別のための属性要素とが、話し手に対する情報として呈示された。

結果は、性別情報に基づくカテゴリー化が、実証研究Ⅰ～Ⅲの一連の研究と同様に引き起こされていた一方で、記号情報（単なる記号としての情報）に基づくカテゴリー化は生じていなかった。このことから、対象人物に関する属性要素の中でも、意味のある社会的属性に基づいてカテゴリー化が生起していることが確認された。

第二部では、入力情報の質にかかわる要因の影響について、情報処理特性論の視点から検討を行い、4つの実証研究を通じて、性別に基づくカテゴリー化効果の生起メカニズムについて、主として対人記憶課題においては、その特徴について明確な知見を獲得できたと言える。その一方、印象評定課題での結果については、得られた知見は限定的なものであると言える。

対人記憶が自動的・非意図的であり、またそのために刺激情報の特質の影響を直接的に受けると考えられる一方で、印象評定は統制的・意図的であり、そのために社会的な状況要因の影響を強く受けるであろうと考えられる。実験状況が現実のディスカッション視聴場面を模した実験設定となっている実証研究Ⅱでの印象評定パターンは、刺激情報の特質のみからは解釈が困難な結果であり、社会的な状況要因を組み込んでいく必要性を喚起するものであった。

第三部では、社会的な状況要因を検討して行くうえで、集団知覚研究領域をはじめとして近年の社会心理学領域において主要な理論枠組みである自己カテゴリー化理論ならびに社会的アイデンティティ理論の枠組みを取り込んだ。これらの理論は現代社会心理学の主要理論であるとともに、情報処理特性論の枠組みの限界を超える理論と考えられる。自己カテゴリー化理論・社会的アイデンティティ理論は、社会的な状況下での知覚や行動に社会的動機論のパースペクティブを取り入れたものと考えられることができるだろう。

ステレオタイプの認知の研究領域においては、これらの社会的動機論が取り入れられることにより、ステレオタイプの適用に関して対立的な仮説が構築されている。例えば、Swan & Wyer (1997)の研究では、次の3つの対立的仮説が取り上げられている。すなわち、（自己）カテゴリー化仮説、ステレオタイプ回避仮説、社会的アイデンティティ仮説である。これらの3つの仮説はそれぞれにその理論的背景と、部分的にはあれ、それぞれの仮説を支持する実証研究での知見を有している。したがって、ひとつの合理的な探究スタイルは、それぞれの仮説が社会的な状況に応じて支持される（支持が変わる）という立場に立ち、その状況依存性を解明し、それぞれの仮説・理論が並存しうることを実証的に示すことであるだろう。

この目的のために、本研究で取り上げる状況要因として、次の2つの要因を取り上げることとした。要因1) 実験参加者がディスカッションの視聴ならびに回答を行う状況が公的

な表明としての性質が強い場面か弱い場面かという要因であり、「意見の公的表明性要因（あるいは短縮して公的表明性要因）」とよぶ。要因2）実験参加者がおかれた状況が、性別の点で数的な多数派（マジョリティ派）か少数派（マイノリティ派）かという要因であり、「実験参加者の性別構成要因（あるいは短縮して性別構成要因）」とよぶ。

まず「公的表明性」要因については、現代社会では、社会的ステレオタイプの適用は望ましいものではないという考え方が広く支持されていることから、この「公的表明性」要因についての検討がなされる。次に、「性別構成」要因は、自身が当該状況において、多数派側か少数派側のどちらに属するかということに基づいて、そのサブグループに対する自己の関わり方が影響を受けるという観点から、自己カテゴリー化理論・社会的アイデンティティ理論での中心的なテーマとして検討がなされる。

〔5：ディスカッション視聴型課題における印象評定判断〕（実証研究V）

実証研究Vでは、ディスカッション場面を視聴するさいの「実験参加者の性別構成要因（マジョリティ条件／マイノリティ条件の2条件）」と「意見の公的表明性要因（高・公的表明条件／低・公的表明条件の2条件）」をともに取り上げた。

印象評定課題の結果は、自己ステレオタイプ化を測度として、男性性次元、女性性次元のいずれにおいても、社会的アイデンティティ仮説を支持する結果を得た。すなわち男性実験参加者・女性実験参加者ともに、自身がマイノリティ状況にある条件に比べて、自身がマジョリティ状況にある条件において、男性性次元において高く、また女性性次元において低く自己を認識していたことが示された。

〔6：ディスカッション参加型課題における印象評定判断〕（実証研究VI）

実証研究VIでは、実証研究Vでは明確な効果が示されなかった「公的表明性」要因について検証するために、実験参加者がディスカッションそのものを行う課題を設定した。この設定は、実験課題に対する実験参加者の関与を高めるために行われた。実験の要因配置は、基本的に実証研究Vと同一であった。

その結果、自身がマジョリティ状況におかれた場合は、高・公的表明性条件下では、伝統的な性ステレオタイプを抑制・回避して、反ステレオタイプの評価が自己に対してなされていた。その一方、低・公的表明性条件下では伝統的な性ステレオタイプに沿った、すなわち性ステレオタイプに合致した評価が自己に対してなされていた。なお、自身がマイノリティ状況下にある場合には、公的表明性要因の影響を受けなかった。

実証研究V、実証研究VIを通じて、社会的な状況要因に応じて、3つの対立仮説それぞれが支持される状況が異なっていること、すなわち社会的状況の相違という要素を取り入れることで3つの対立仮説が統合できることを示した。

〔7：交差カテゴリー化状況下での対人記憶過程と印象評定判断〕（実証研究Ⅶ）

実証研究Ⅶでは、カテゴリー化処理という枠組みから社会的ステレオタイプについて検討すべき上で残された課題として、以下の2つの問題設定を扱う。

1) 「交差カテゴリー化」を取り上げ、操作する要因や状況設定を精査した上で実施し、性別に基づく対人記憶過程でのカテゴリー化効果の低減を実証する。

2) 対人記憶でのカテゴリー化効果と、印象評定でのステレオタイプの評定の直接的な関連性について、条件分岐的に析出する。

まず「交差カテゴリー化」を用いて、話し手と発言内容を照合する課題における話し手の性別に基づく強調化効果の生起について検討した。同性内エラー数は異性間エラー数よりも有意に多く、性別に基づく強調化効果が生じていた。ただしその指標値（同性内エラー／異性間エラー）は1.71であり、これまでの一連の研究に比して低い値を示した。

また男性性ポジティブ次元、女性性ポジティブ次元ごとに、話し手の性別に基づくステレオタイプの評定がどの程度なされているかをあらわす指標を作成した。カテゴリー化処理における強調化効果の程度と、話し手へのステレオタイプの評定との関連性について相関分析を行った結果、実験参加者全体を対象とした場合の相関関係は、これまでの先行諸研究と一貫して、男性性ポジティブ次元、女性性ポジティブ次元の両次元ともにおいて2つの測度間の相関関係は無相関であった。続いて、実験参加者の性別要因と公的表明性要因を用いて実験参加者を4群に分割し、それぞれの群ごとに「強調化効果」と「ステレオタイプの評定」の相関関係について検討を行った。その結果、女性性ポジティブ次元においては、男性参加者・公的表明条件と、女性参加者・公的表明条件において、両指標間に有意な負の相関関係が示された。この結果は、実証研究Ⅴと実証研究Ⅵでの仮説枠組みを援用すると、3つの対立仮説のうち「ステレオタイプ回避仮説」を支持するものと位置づけられる。入力情報処理における強調化効果の程度が、話し手に対する反ステレオタイプの評定と結びついているという、公的表明条件下において得られた知見は、「創られた性ステレオタイプの評定」と呼ぶべき現象と位置づけられ、評定対象の性別カテゴリーによるカテゴリー化処理をもとにして、公的表明条件のみで生じていることが認められた。

最後に、終章部において、本研究全体のまとめと今後の展望について論じた。